

はじめに

今年は教祖歿後130年、教典刊行30年に当たります。

教典刊行により公開された「覚帳」は、金光大神の全生涯に及ぶ信仰が明らかになる期待を抱かせる一方、それは秘めた書であり公開することは適切か否か、また既成の信仰観と異なる激しく厳しいものが予想され、いかに受けとめうるかという懸念も表明されていました(徳永篤孝「結界取次依立の系譜」『金光大神を頂く』金光教北九州教務所、昭和五八年)。確かに「覚帳」には、「人代／神代」「万国まで残りなく金光大神でき」など信仰的使命感や世界観の高揚を示す面と、向明神「手切れ」・金光金吉の問題や死に至る金光大神と「身代わり」等が示され、従来の枠に収まり切らないもの、未知なる金光大神ともいうべきものに出会う機会も、幾分か危惧と共に看取されていました。

その一つが、今日取り上げる「身代わり」のお知らせです。

人民のため、大願の氏子助けるため、身代わりに神がさする、金光大神ひれいのため。(覚帳27—15—2)

「身代わり」は、一般に「他人の身にかわること」を意味します。解釈上は、「神の身代わり」と「氏子の身代わり」との両説があります。一つは肉体をもつての取次を終え「神の身代わり」となって、永遠に働き続けるという教義的な意味を帯びた解釈です。今一つは金光大神の一生が、氏子になり代わって礼・詫び・願いをすると共に、神になり代わって教えをなし通した生涯の終わりとして、「氏子の身代わり」の死を迎えたというものです。平成十五年刊行の教祖伝『金光大神』では両論併記となっていますが、日本語の構成からすると結論部に置かれた「神の身代わり」説に比重がある印象になります。

確かに金光大神は生前、「金光大神は形がじゃまになって、よそへ出ることができない。形がなくなってからは、来てくれと言う所へ、すぐに行ってやる」(理解Ⅱ難波なみ9)とも、「此方とて生身であるから、やがては身を隠す時が来る。形がなくなっても、どこへ行くのでもない。金光大神は永世生き通しである」(理解Ⅱ福嶋儀兵衛22—1)とも語っていました。取次の永遠性を重視する「神の身代わり」説は、このような伝えの具体的展開・結実として、最後のお知らせを捉えます。そこには生身の生を超えて、この祈りが生きるという信の姿があるでしょうし、その願いと姿勢は幾多の先人たちによっても、大切に生きられたものでしょう。

但し、教典を通じて、「身代わり」と使われる場合には、誰かの苦難を代わって背負うという意味で共通しています。そのことから直ちに、「覚帳」最後の「身代わり」も同様の意味だという結論にはならないとしても、逆にまたそれらの用例を無視してよいということにもならないでしょう。また「神の身代わり」説を前提にするならば、「金光大神は永世生き通し」という表現でもよかった(むしろそう書かれる方が自然)のに、なぜ「覚帳」には「身代わりにさする」と書かれたのかという点に十分応えられていません。

また金光教の歴史を遡れば、「覚書」が知られる以前の教祖像は、立教の場面で氏子の罪を背負って修行することを神に誓うというものでした。そのような伝承の教祖像と、「覚帳」の最後のお知らせとの符合に驚かされます。さらには難儀な出来事を受けとめた数々の信奉者の経験にも、「身代わり」に通じるものが信心の水脈として生き続けてきたでしょう。「覚帳」が教団に提供され、解説に着手された当初も、「身代わり」という言葉から窺える代受苦的な意味で捉えられていました。しかし『教典』刊行が近づく前後から、贖罪的な意味を連想させることへの違和感が表明されます。「神の身代わり」説はそれに答えるものでもあったと思います。

このように、言葉の意味解釈というレベルで考えるならば、「神の身代わり」説には無理矢理ひねり出したような印象もつきまといますが、「氏子の身代わり」説にも私たちの信仰にのしかかるような圧迫感を感じます。このような問題を抱えつつ、このお知らせが金光大神にどう響くか、このお知らせから眺められる天地の風景はどのようなものであろうかと、「覚帳」をもとに窺ってみたいと思います。

一、山川海、天地のこと

1 地の狂い

金光大神は、「「天地金乃神と氏子の間柄のことを、金光大神、参って来る氏子に話して聞かせよ」とお伝えくださったので、このように話をしておる」（理解Ⅰ山本定次郎48—3）と語っています。またこの伝承者は初参拝の時、「人間は、どうして生まれ、どうして生きているかということを知らねばなりませんなあ」と話しかけられ、続けて聞かされた「天地のお恵みについてのみ教え」が、胸に突きささるように響いて感激したと伝えています（理解Ⅱ山本定次郎2）。金光大神は二十余年、そのことをし続けたと言えるでしょう。

明治十三年旧十月二十三日、「一つ、地の狂い、またまた世の狂い。山川海、天地のこと。金光大神へ知らせおき」（覚帳24—20—3）というお知らせがありました。

この年には「人代と申し、わが力で何事もやり。今般、神が知らしてやること、そむく者あり」という社会の状況に対して「神代になるように教えてやる」と指摘するお知らせ（覚帳24—25）もなされています。そうした「世の狂い」と通じつつ、その底を割り裂くように「地の狂い」が示されました。ここで「天地のこと」が「山川海」と表現されています。「山川海」は、まず「里はもとより、山川海、日月様の照らしたまうほどの所は」（理解Ⅲ御道案内3—2）と言われるところからすれば、人間が生活を営む「里」よりは、その周囲に広がる領域を指しています。併せてそこは種々の食物が生み出される場であり、人間はそれによって生き、働くことができると説かれます（理解Ⅰ山本定次郎5—1）。また、唱歌「故郷（ふるさと）」冒頭に「兎追いし かの山 小鮎釣りし かの川」と歌われるように、日本人にとっては幼年からの思い出に浮かぶ故郷の原風景とも言えます。これに海が加わり、山川海と並べた時には、天地の中で人間はじめ万物の命を支える水の循環が、この順序でなされていることが指摘できます。合唱組曲「水のいのち」（高野喜久男作詞）は、雨となって降り注いだ水が、地面に落ち、川となって時に淀んだり渦巻きながら流れ流れて海に注いでいくまでを、「雨」「水たまり」「川」「海」「海よ」の構成で表現しています。最終曲では、それまで旅してきた水が、海で暫し休らった後、海底から舞い上り、やがて空に上昇して再び慈雨となることが暗示されます。それぞれの場面の水の様相に人間の生の姿が重ね合わされ、水もまた一つのいのちあるものとして、その一生が表現されます。

そして、しかしまた、このような水の流れに乗せられて、人間生活から排出される汚れから、「大祓詞」で唱えられる「罪穢れ」に至るまでが、「ここ」でないと押し出され続けます。

2 天地の不可思議

「天地のことをあれやこれや言う人がありますが、天地のことは人にはわかりません。天地のことが人にわかれば潮の満ち干が止まりましよう」（理解Ⅰ近藤藤守9）という理解があります。これは現代的な意味で人間社会に対する警鐘のように響きます。「天地のことをあれやこれや言う」には、天地のことを予測・判断・制御できるといったこともあるでしょう。謙虚な思いで分かろうとすることは大切ですが、分かったことをもって天地を管理しようとすることへの警告と言うべきものです。もし天地のすべてが分かったら、潮の満ち干が止まるといいます。潮の満ち干が止まれば、もう津波も起こらないかもしれませんが、それは果たして海なのでしょうか。海が海であり、天地が天地であるとはどういうことなのか。人間の思い通りになった時、天地が天地であることをやめてしまうかもしれないという、不気味な逆説が暗示されています。

天地は計り知れないもので、「いのちの不思議と摂理」とも言うべき事柄があります。

大岡信という詩人が、ある染織家の許を訪ねた時、見事なピンク色を目にして、このピンク色は何からとるのかと尋ね、桜からとるのだと聞かされました。最初は当然桜の花びらのことだと思っていたが、よく聞けば花びらではこの色は出ず、桜の皮を煮出してとるのだということでした。目に見えるピンクは、見えないピンクの一端だったということ、文学的想像力も交えて次のように表現しています。「花びらのピンクは、幹のピンクであり、樹皮のピンクであり、樹液のピンクであった。桜は全身

で春のピンクに色づいていて、花びらはそれらのピンクが、ほんの尖端だけ姿に出したものにすぎなかった」（大岡信『ことばの力』、花神社）。

また、先に挙げた合唱組曲「水のいのち」最終曲の出だしは「ありとある芥 よごれ疲れはてた水 受け容れて すべて 受け容れて つねに あたらしくよみがえる 海の不可思議」です。詩人と呼ばれる人々は、この世界から、普通の人とは違ったものを見、聴くようです。きれいな海であれ汚れた海であれ、それは水の責任ではないこと、そして汚れに水の労苦を見出す目が感じられます。そしてまた、全てを受け容れて、それでいて常に新しい海という詩に触れると、当たり前になっている風景に天地の気づかぬ一面がありうべからざるものとして現れ、かつ人間が生きる上でのあらまほしき姿にもだぶらされてきます。

かつて水銀で海が汚染され、その魚を食べた人間や猫が病気になって亡くなった水俣湾で、海が少しずつきれいになっているといわれます。水銀に耐える性質をもった細菌がいて、水銀を分解する働きがあるそうで、その秘密を解明して水質浄化に役立てようと研究している人もいます。天地の不思議、いのちの不思議というべきか、「すごいことだ」と思いましたが、人間がしでかした尻拭いを天地全体がしてくれているのですから、慎みのない思いだと考え直しました。金光大神なら「恐れ入ります」と額ずいて祈念を込めるでしょうか。

これは一例ですが、自然的のみならず人工的排出物をも受け容れて浄化し蘇生する海の、際限のない、しかしいつか限度を越えるかもしれぬ繰り返しがあります。それらを抱えもつ「山川海」であり、そこに孕まれる「狂い」の止め難い真っ当さも含意されるでしょう。

二、天地の莊嚴

1 いのちの痛み

先に述べたように、神から金光大神に「地の狂い」が知らされましたが、その一方で金光大神は「天は昔から死んだことなし、地が昔から死んだことなし。日月、相変わらず」（理解Ⅰ市村光五郎二5—3）と教示していました。この「理解」の伝承者市村光五郎氏は明治十五年の初参拝ですから、金光大神は既に「狂い」を知らされつつ、このように教諭していたこととなります。これを説く金光大神の心は、どのように「地」の心と反響していたでしょうか。

この、天地の痛みともいえるべきものについて、水俣病患者と交わりながら人の生と歴史に思いをめぐらす石牟礼道子には、一方で文明社会とそこに生きる人、その行く末への厳しい憂いに満ちた視線があります。また一方で患者達の健気で控えめな、しかし祈りなしにはゆけない、人と風土への温かな皮膚感覚があります。そして、雲を貫いて天空から射す陽光の下、患者たちの慰められぬ心と工場の廃棄物が、魚たちの死や病とともに沈んでいる海の底で、同時にその海であらゆる生命が受胎しつつある様を想像するとも書かずにいられません。そのようにたとえ被害を受けても被害者意識を言い募らないことや、大変な献身がなされているのに、そのことを気負うでも誇るでもない点で、人と天地に共通して莊嚴が見出されます。

「一つ、おどろきありても信心する者には心配なし。夏ばかりとは言わんぞ。寒でも不意病はあるぞ。天地の間のおかげを知った者なし。おいおい三千世界、日天四の照らす下、万国まで残りなく金光大神でき、おかげ知らせいたしてやる」（明治十五年旧十月十四日、覚帳26—22）。前半部は「おどろき」

「不意病」を警告しつつ、「心配なし」とも諭すお知らせです。後半部は、広大な「神願」の表明として、また「世界救済」という大きな責めと、肉体の死が迫り来る金光大神とのギャップを照らすものとして注目されてきました。「天地の間のおかげ」とは、万物を生かし育む働きであり、それは「理解」に「信心はせんでも、おかげはやってある」（理解Ⅰ市村光五郎—2—1）とも説かれています。同じ市村氏の伝えが語るような、「狂い」を抱えつつ生き続ける「地」のありようが、別の表現でリフレインされていると言えるでしょう。このように見てくると、「天地の間のおかげ」とは、第一には遍き恵みですが、それはまた「狂い」を抱える天地から、その「狂い」を持ち来らせたかもしれない人間への無条件の贈与という重ねての意味を帯びます。「天地の間のおかげを知った者なし」は、事実を説明す

る文としては人間の現状についての問題指摘ですが、神からすれば人間へのもどかしさを抱えつつ、信心の動きを求める促しであり、金光大神とすれば天地の存在感と迫りに感じ入った者の恐れ畏む念がひとときわに増すでしょう。

2 星空の下

「覚帳」によると、明治十五年旧暦の年末に、金光大神は夜中に起きて星を拝んだといます。現在の時刻で午前二時頃、一日目は晴れでしたが、翌日は曇りでした。記述からは意図して起きて見た様が窺えます。人々の暮らしが近代化される以前には、星は時間や空間を計る尺度として重要であり、さらには人間の運命を支配する北斗七星という信仰もありました。

木下順二の戯曲『子午線の祀り』で、壇ノ浦合戦の前夜、平知盛が配下の者に「見ろ、あの北斗を。あの剣先の方角には金神が位して、それを背に負って戦わねば戦さに必ず敗れる」と、かつて陰陽道の博士から聞いた話を語り、気にすることはないと答える配下に、「天と地の間にはな、民部よ、われら人間の頭では計り切れぬ多くのことがあるらしいぞ」と告げる場面があります。平知盛は、平家の実質的な指揮官であり、合戦の行方を見届けて海に身を投げます。その際「見るべきものは見た」との言葉を残す彼が、天地の間であって運命を左右する星を語る場所に、深い余韻が残ります。

東日本大震災被災者で、「震災の夜が、今まで見た星空で一番きれいだった」と振り返る人がいます。また避難所生活で眠れぬ夜に空を見上げると満天の星が見え、こんな時でも天地は変わらず動いていると感じた信奉者がいます。一日で激変した境遇と引き比べて、いつに変わらぬ星の姿が心に映じたことの表れです。その星が人の思いなど関知しない無情の存在ならば、その輝きはいたずらなものであり、冷徹さを感じさせるだけでしょう。しかし普段は存在すら気につけない星が、漆黒の天空に瞬いて遠い光を投げかける様を、儂いながら心強くも感じ、心に些かの灯火が点ったということでしょうか。あるいはその変わらなさが、寄る辺なき者の寄る辺となりうる感興を催したのでしょうか。星に向かう人間が、境遇を照らす光で捉え返されていることが窺えます。

天地はしばしば自然との関わりで説かれますが、空間的広がりをもつ環境の意味のみならず、森羅万象を抱える意味の宇宙としても捉えられるでしょう。宗教は「極大の偶有性(ほかでありうる)を必然性(ほかではありえない)へと転換してしまう」と言われますが、星を拝む金光大神の姿には、万物を生かし万物を抱えて止むことなく運行する天地、そして「狂い」をも抱えつつ自らも一つのいのちとして運行する天地に身を任す様相が窺えます。

三、天地の中の死生

人間が天地の間に生かされて生きていること、言い換えれば天地の間で人として生きて死ぬことは、誰もががしていることであり、また誰もが逃れられないことで、それだけに当たり前と思われがちでいて、本当に大切なことです。

明治十六年旧八月二十一日に「人民のため、大願の氏子助けるため、身代わりに神がさする、金光大神ひれいのため」(覚帳27—15—2)というお知らせがあり、これは金光大神が「覚帳」に記した最後の記述となりました。

教祖百年祭時の『金光教教典』刊行に伴い、「覚帳」の登場と「身代わり」のお知らせは、死という生涯最後の時点から、そして「身代わり」にさせるという神の視点から、金光大神の「生涯」の意味をトータルに求める課題を投げかけました。「生涯」には、生命があるという意味での「生存」、人として暮らしていくという意味での「生活」とは異なる次元があります。それは人の一生全体を指しますが、時間的・量的な意味のみならず、死によって区切られることで見えてくる生の質のようなものを含むでしょう(上田閑照『人間の生涯ということ』、人文書院)。

そのような意味で金光大神の生涯を振り返ると、安政六年「立教神伝」で難儀な氏子を「取り次ぎ助けてやってくれ」との頼み(覚書9—3—1~7)を承けて以後の金光大神は、氏子になり代わり神になり代わる「取次」に奉仕してきました。死を前にした「身代わり」はなり代わることの極限の形だと言

えるでしょう。また明治六年に「天地乃神より生神金光大神差し向け」（覚書21—21—6）という神伝を受けて、救済者としての金光大神の使命感も注目されてきました。

その点では金光大神がこの世に生まれ、神と出会うということがあり、それはまた神が金光大神と出会い、これを見出すということでもありました。この出会いとその後の歩みによって、生神金光大神が生まれ、そのことによって人々が天地金乃神に出会い、天地が生神金光大神に出会うことができたと言えるでしょう。

ところで先の「身代わり」については、旧教祖伝記『金光大神』（金光教本部教庁、昭和二八年）の「やすらかに世をさった」というイメージと齟齬するものであり、またキリスト教的な贖罪の意味をも連想させたため、先述のように代受苦的な「身代わり」解釈への忌避感が働いた時期がありました。そして今日では、肉体の死後も神の働きが永遠に働くための「神の身代わり」という説があります。

この説に集約されるように、「形がなくなっても、どこへ行くのでもない。金光大神は永世生き通しである」（理解Ⅱ福嶋儀兵衛22）、「金光大神は形がのうなったら、来てくれと言う所へ行ってやる」（理解Ⅲ金光教祖御理解19）という伝えがあり、それは金光大神のみならず、後の布教者達にも願いとされたものでした。そのような「死んでも死なない」とも言うべき信仰の姿があれば、片や死を死として受けとめる信仰の姿もあるでしょう。

「身代わり」のお知らせから六日後に金光大神は広前を退き、十九日後に当たる旧九月十日（新十月十日）に亡くなります。金光大神は既に明治九年頃に、「旧暦と新暦とがあるが、先で両方が九日十日と連れ合っていく時がある。その時には神上がりする」（理解Ⅱ伍賀慶春21）と、死の予告ともいえる言葉を残しており、死去の日はこの言葉通りになりました。またその日は、生前から定められていた金光大神の神格を祀る縁日であり、中でも旧暦九月は年に一度の祭り日でした。

このように金光大神の帰幽は、九日十日という日が新暦と旧暦で重なるという天地のサイクルを反映するようでもあります。それは、天地を礼び畏み、天地の道理を説いた一生に相応しいものと思えます。さらに帰幽の日が金光大神の祭り日であったことも、神を祀る者が神になる信心の標として示唆深く、また神の定めた日に死去するという厳粛な出来事に対する畏敬を催させるもの（理解Ⅰ市村光五郎—34）でもありました。このような幾重にもわたる金光大神の帰幽の姿は、死生に及ぶ信仰の意味を求めていく重要な内容を含んでおり、ひいては喜びや悲しみと共にあり、短くも長くもある人の一生を照らす上で、小さくとも確かな光を投げかけうるものであるとの思いも禁じ得ません。

この講演では晩年のお知らせから、「狂い」を抱えつつ生き通しである天地の姿を窺ってきました。その荘厳とも言える天地は、金光大神の生涯の意味を映すと共に、その生涯の意味を照らすかのようです。「神の身代わり」説は、肉体の死後も生き続けるので、死後も世界と共にあることを前提とします。これに対して「氏子の身代わり」説では、残る世界と人々の幸福が死の意義を増すと共に死にゆく者の心を安らかにすることになる局面があります。このことを天地との関係に引き換えてみると、人が死によって大きなものに溶け込んでいくだけでなく、その大きなものゆえに自身の死が生き、自身の死ゆえに大きなものが生きるというような関係が浮かび上がります。天地の荘厳なることは、金光大神の「身代わり」を、孤高の使命感のみならず、大いなる成就として支えるものではないでしょうか。